

豊富で良質な海産物・農産物・畜産物にこだわり、皆様に信頼される
商品作りを通じ、食卓に「おいしいしあわせ」をお届けする



代表取締役社長
株式会社マルハニチロ北日本 福貴迫 芳郎 (ふきさこ よしろう) 氏
(2022 年 4 月 1 日賛助会員入会)

【主な事業内容】

- ・事業内容—缶詰・瓶詰・冷凍食品・レトルト食品・飲料の製造・加工・販売
- ・本 社—北海道釧路市海運 1 丁目 1 番 9 号 埠頭ビル
- ・設 立—1952 年 5 月(2010 年 4 月に統合) ・資 本 金—5,000 万円
- ・売 上 高—104 億 36 百万円(2025 年 3 月期見込) ・業 員 数—347 名(2025 年 2 月現在)

今回の会員企業トップインタビューは、北海道および青森の豊富で良質な海産物・農産物・畜産物を活かした製品を提供する、株式会社マルハニチロ北日本 福貴迫 芳郎 社長に伺いました。

同社は、北海道釧路市に本社を構える食品メーカーで、北海道・青森の海産物や農産物を活かし、缶詰、冷凍食品、レトルト食品などを製造・販売しています。地域社会との連携を大切にし、「世界においしいしあわせを」をスローガンに、品質向上と環境配慮を重視した商品開発を進めています。

Q. 貴社の創業の経緯・沿革をお聞かせください。

A. 株式会社マルハニチロ北日本は、2010 年 4 月 1 日に北海道・青森地区のマルハニチログループ 5 社(マルハニチロ食品釧路工場・森工場、デイジー食品工業、オホーツクニチロ、ニチロ十勝食品、青森罐詰)が統合して設立されました。これにより、生産拠点の集約が進み、効率的な運営体制が確立されました。

設立当初の本店所在地は北海道河西郡更別村でしたが、2012 年 6 月に帯広市へ移転し、2017 年 5 月には釧路工場内、2020 年 3 月には釧路市埠頭ビルへと本社機能を移しました。物流や生産拠点との連携を強化し、経営の効率化を推進しています。さらに、2016 年 8 月に十勝工場を分社化し、エア・ウォーター株式会社へ株式譲渡、2018 年 9 月には宗谷工場の事業を富良野工場へ移管しました。

2022 年 4 月に稼働した釧路第三工場では、道東沖で漁獲されたイワシを活用した蒲焼缶詰の生産を開始。最新の設備導入により品質向上と環境負荷の低減を実現しました。現在は釧路市を拠点に、地域資源を活かした缶詰、冷凍食品、飲料などの製造・販売を行い、安心・安全な食品の提供を続けています。

Q. 貴社の経営方針、経営者として重視していることについてお伺いいたします。

A. 私たちは、マルハニチログループの一員として、「誠実を旨とし、本物・安心・健康な『食』の提供を通じて、人々の豊かな暮らしと幸せに貢献する」ことを理念に掲げています。「世界においしいしあわせを」というスローガンのもと、地球環境に配慮しながら持続可能な『食』の資源調達や技術開発を進め、品質の向上に努めています。

経営者としては、地域の海産物・農産物・畜産物を活かし、高品質な商品をお届けすることを重視し、食の安全・安心を最優先に考えながら SDGs への貢献や地域社会との共生にも積極的に取り組んでいます。特に、地域資源を活かした商品開発を進め、より豊かな食文化の創造を目指しています。

また、従業員が誇りを持ち、安心して働ける環境づくりにも力を入れています。働きがいのある職場を提供することでモチベーション向上を図り、個々の能力を最大限に発揮できるよう支援しています。さらに、人材育成にも力を入れ、技術や知識の向上を促す研修制度を整備し、企業全体の成長につなげています。従業員が安心して働ける環境を整えることが、企業の発展や高品質な製品の提供につながると考えています。今後も、安全でおいしい食品を提供し続け、社会全体への貢献を目指していきます。



釧路第三工場



釧路工場製造風景

Q. 改めて製造している商品や事業の特長点についてお聞かせください。

A. まずは北海道および青森の豊富で良質な海産物・農産物・畜産物を活用し、多彩な製品を提供しているということです。特に、鮭、蟹、帆立、鯖、秋刀魚などの缶詰や、100%野菜ジュースなどが主力商品となります。

特徴として、地域資源を活かした製品開発にこだわっています。例えば、「佞武多さば缶詰」では、八戸港で水揚げされた脂の乗った鯖を使用し、津軽味噌や津軽海峡の塩、青森県産の焼き干しなど、地元の調味料を取り入れています。

また、釧路第三工場では、新たに焼成ラインを導入しました。これにより、道東沖で漁獲されるイワシを使った「いわし蒲焼」缶詰の生産が可能となり、本格的で高品質な焼成商品を提供しています。

さらに、熱源として天然ガスを使用することで、エネルギーや CO2 の削減を図るなど、環境への配慮も行っています。

製造技術や品質管理の向上に努め、消費者に安全で高品質な製品を提供することを重視しています。また、地域や教育機関との連携を深める取り組みも行っており、大

阪樟蔭女子大学との共同プロジェクトで製品レシピの開発や試食会を実施しています。

これらの取り組みにより、多様な製品を通じて消費者に「おいしいしあわせ」をお届けしています。



自社ブランド品



ぶりラー油

Q. 貴社の社風、社員気質などはどのように感じておられるでしょうか。

A. 「誠実さ」と「協調性」を大事にしています。朝礼・昼礼時に皆でグループ理念を唱和していることもあり、つねに誠実な仕事をするという意識が根付いてきた様に感じますし、チームで動く意識も強くなっています。以前は職人気質が強く、「自分の仕事は自分で」という雰囲気がありましたが、今は現場で問題が起きたら、責任者が集まってみんなで対策を考えるようになっていきます。

大きな転機は2013年の当時のグループ会社での品質事件です。これをきっかけに、組織の在り方と行動を見つめ直し、社員全員が安全と品質に向き合う意識と姿勢が更に強まったと感じています。

Q. 北海道は全国に先んじて人口減少が進み、労働者不足も顕在化しています。人材確保の取り組みに加え、当本部もご利用いただいておりますが、人材育成方針についてお聞かせください。

A. 人材確保にはかなり苦労しています。特に新卒採用は厳しく、ここ2年大卒・高専卒は採用がゼロです。高卒も毎年1~2人程度を採用し、現場の人員はなんとか確保できていますが、将来的な管理職候補が足りなくなる可能性があります。即戦力としての中途採用のほか、マルハニチロ本体からの出向者を受け入れる動きなどにより、計画的に改善していくことを目指しています。

人材育成面では、OJTを中心にしながらも、グループ全体の研修や外部研修を活用しています。特に階層別研修や自己啓発の通信教育を積極的に推奨し、異業種交流の場も作って社員の視野を広げるようにしています。

Q. 働き方改革や女性の活躍に関する取り組みはいかがでしょう。

A. 色々と働き方改革の取り組みを進めてきました。25年度は労働時間を見直し、年間労働日数を減らすことにしました。従業員の皆さんが少しでも自分の時間を作る機会を増やすことで、ワークライフバランスの取れた働きやすいと感じていただける環境も整備しています。特に最近「休みが少ない会社を選択いただけない」という現実もあります。採用にあたり当社を選択いただけるよう引き続き取り組んでいきたいと思っています。

女性の参画も重要なテーマで、会社としてダイバーシティ&インクルージョン(D&I)を進めています。LGBTQ+の対応も含めて、工場の設備や環境を整える動きも進めています。女性社員は全体の2割ほどで少ないのですが、次年度初めて女性課長が誕生します。今後は女性管理職をもっと増やしていく方針で、役員登用も視野に入れています。ただ、まだ「管理職になりたくない」という女

性も多く、意識を変えていただけるよう取り組むことも今後の課題だと考えています。こうした改革を進めながら、男女問わず活躍できる職場を作っていくことがこれからの会社の大きな目標です。

Q. 貴社の課題、今後の取り組み・方向性についてお聞かせください。

A. 当社の課題として大きいのはインフレ経済への対応と、先ほども申し上げましたが人材確保の難しさです。物価も高まるなか、賃金も上げなければなりません。その対応として、商品価格を上げることも考えられますが、その場合現実の問題として販売数量が落ちるというジレンマがあります。特にスーパー向けの市販用缶詰はその傾向が強く、生産数量が重要な当社としては今後どう向き合うかが課題です。

人材確保の面では、新卒採用は厳しく、また管理職候補が不足しています。引き続き多くのメンバーと知恵を出し合い、広く人材を確保していきたいと考えています。

今後の取り組みとしては、販路の拡大と付加価値のある商品開発に一層力を入れていくことです。スーパー向けだけでなく、業務用市場(学校給食・介護食・回転寿司チェーンなど)にもっと製品を提案していきたいと思っています。また、ネット通販やふるさと納税などEC市場での販売にも力を入れて、直接消費者に価値を伝えられるよう事業展開したいと考えています。

さらにSDGsや環境対応も強化して、瓶・缶詰容器のリサイクル性の高さをPRする活動も進めています。働き方改革や女性参画を進めながら、持続可能な会社づくりを目指していくことが重要であり、事業運営の方向性の柱になると思います。

Q. 特に印象に残る仕事・事柄をお聞かせください。

A. 社長になってから印象に残っているのは、釧路第3工場の立ち上げです。就任してすぐの大仕事で、工場の建設から稼働まで関わっていました。ちょうどコロナ禍と重なり、なかなか予定通りに進まないこともありましたが、竣工式での挨拶も、マスク着用で話すのが息苦しく、口に貼りついて喋りづらかったのを今でも覚えています。しかし無事に稼働できたことで、現在では生産力が大きく上がり、軌道にのったことで大きな安堵感を感じています。

もうひとつ印象に残っているのは当時のグループ会社で起こった2013年の品質事件です。これは社長になる前の話ですが、その後の会社の意識を大きく変えるきっかけになったと思います。事件を教訓にグループで「事件を忘れない日」を設けて、毎年意識を共有するようになりましたし、それ以降、当社でも品質管理や社員の意識改革が進んで、問題が起きたときにみんなで共有・改善する文化ができました。

営業面では、ネット通販への参入や業務用市場の開拓など、従業員の努力もあって、今ではしっかり売上・利益が伸びてきていることです。

どれも簡単ではない仕事でしたが、変わるためにはやらなければならない事だし、会社の未来に向けた大事な一歩だと思っています。